

コモンズ —学びの共同体—



- 「観光創造コモンズ—着地型観光による明日香村の地域振興—」(2)
- 「都市文化コモンズ—地域や企業と連携した様々な取り組み—」(3)
- 「コミュニティデザインコモンズ—関係団体や地域住民との関係の土台作り—」(4)
- 「地域経済コモンズ—担当教員が宇陀市全域を見学—」(5)
- 「各地域における学生の活動」(6)
- 「新任教員の紹介」(7)
- 「情報コーナー」(8)

観光創造コモンズでは、「着地型観光による明日香村の地域振興」をテーマに明日香ニューツーリズム協議会との連携によりさまざまな地域活動を展開している。2013年度に実施した主要な活動を取り上げて紹介する。

①民家ステイ・モニターの実施

昨年から国内外の中高校生を対象に民家ステイを実施している。受入家庭数は70軒を超え、民泊生徒数は昨年一年間で1,943人を記録した。学生たちは各受入家庭にモニターとして民泊し、評価シートに基づいて、受入対応、料理内容、清潔度などについて調査する。その結果を各家庭にフィードバックし、改善を図っていく。すでに本年度は3年生、2年生を中心に3回のモニターを実施し、総勢40名近くの学生たちが参加した。

②歴史ガイドツアー(あすか歴史探検隊)

明日香村で行う民家ステイ(民泊)の体験型プログラムとして、学生たちが歴史ガイドツアーを企画し、実際に自らが村内の歴史ガイドを行う。これは、民泊のオプションとして位置づけられており、徒歩コース、自転車コース、雨天コースの3つのコースから構成されている。本プロジェクトは通称「あすか歴史探検隊」と呼ばれ、参加者がわくわく感やドキドキ感を体感することを目的として実施している。本年度、6月に東京都江戸川区の中学生138名、7月に県内高校生12名、9月に町田市の中学生5名を受け入れた。9月に開催された日本観光振興協会主催の産学連携オープンセミナーで本プロジェクトは最優秀賞を受賞することができた。

③インバウンド交流事業(Asuka International Free School)

明日香ニューツーリズム協議会では、インバウンドの受入も行っている。海外から中高生や先生方を明日香村に迎え入れ、民家ステイを実施し、オプションとして学生たちが企画した体験交流型のプログラムを提供している。本年度は7月にニューヨーク商工会議所主催で学校の先生16名、9月にオーストラリアの高校生11名、10月にシンガポールの中高校生38名に、「折り紙」「こま回し」「歴史文化学習」「サイクリング」などの体験交流型プログラムを提供した。学生たちは万葉衣装を身につけ、英語で自己紹介やプログラム説明を行い、参加者との交流を楽しんだ。

④産業観光ガイドツアー

本年度から新しく産業観光ガイドのプロジェクトを実施している。学生達は、村内の古くからの醤油蔵や物販販売所などを案内し、その歴史などを説明する。本年度は12月に近畿商工会連合会女性部12名の方々をご案内した。

観光創造コモンズでは、今後とも明日香村を中心に地域の人たちと連携を取りながらCOC関連事業を展開していく予定である。



図1 民家ステイで受入家庭との団欒



図2 中学生に歴史ガイドを行う



図3 インバウンドとの体験交流



図4 産業観光ガイドを実施

2013年度に実施された活動の中でも学生が地域で展開した活動をいくつか紹介します。まずは、奈良の新たな広報のあり方を考える「ならば-奈良Laboratory」です。奈良市観光協会との連携事業であり、奈良の魅力进行调查、研究し、その成果を奈良の広報に活かそうというものです。これは「Webを使った発信」と「着地型ツアー企画の発案」の2つの方向性で活動を進めています。Webを使った発信については、SNSやホームページを利用した活動を行っています。奈良の魅力的な場所や取り組みについてフィールド調査を行い、そこで得られた成果を、文章と写真を使ってWeb上に発信していくことで、自分が調べて発見したことを人に分かりやすく説明する力を身に付けてもらいます。



図1 地図を見ながらツアープランを練る

着地型ツアー企画の発案については、まず、奈良市観光協会から奈良観光の課題について学生に対して講演をいただきました。それを踏まえたブレインストーミングで奈良の課題や今後の可能性を表面化し、各自が奈良をアピールできる着地型ツアー企画のアイデアを出していきます。こうした成果は、様々な場面で学生によって発表されています。たとえば、国連世界観光機関（UNWTO）アジア太平洋センター主催の観光教育セミナーでは、カンボジアやラオス、ミャンマー、ベトナムから訪れた観光関係の行政や民間の参加者に対して英語で発表を行いました。その際、「ならば」とともに活動を発表したのは「ならなら」の取り組みです。「ならなら」は「泊まってみ奈良? ~町屋ステイで奈良を知る」という政策提案を行い、公開コンペによって最優秀賞に選ばれたことを契機として始まった活動です。奈良県企業立地推進課と学生でプロ



図2 「ならなら」メンバーの発表に熱心に聞き入る海外からのセミナー参加者



図3 学生のアイデアを元に活発なディスカッションが行われる

ジェクトチームを結成し、小規模宿泊施設支援事業団体「ならなら」として各種活動を行っています。こうした場で発表することによって、自分たちの活動を再確認するとともに、様々な意見をいただいて活動をさらに充実させていきます。「ならば」では、2013年度の締めくくりとして、学生が考案した着地型ツアー案を行政や宿泊業関係者をはじめとした実務家の方々に聞いていただく「奈良Laboratory 平成25年度事業報告会」を実施しました。

学生たちは自分の頭で考え様々な意見をもらいながらブラッシュアップしてきたアイデアを企画ポスターにして堂々と発表しました。その後、参加者からの質疑応答を通して、実現に向けて何が必要なのか、改善すべき点はどこなのかを学びました。他にも、企業と連携したツアー造成事業も実施しています。近畿日本鉄道と連携し、これまでにないツアー商品を作る活動を行っています。学生と教員だけでなく旅行商品造成のプロである現役の社員も交えて、アイデア出しから企画のブラッシュアップを経て、実際に商品化をすることで、論理的な思考や自分の考えを人に伝えるコミュニケーション能力、アイデアを実現する力を醸成しています。



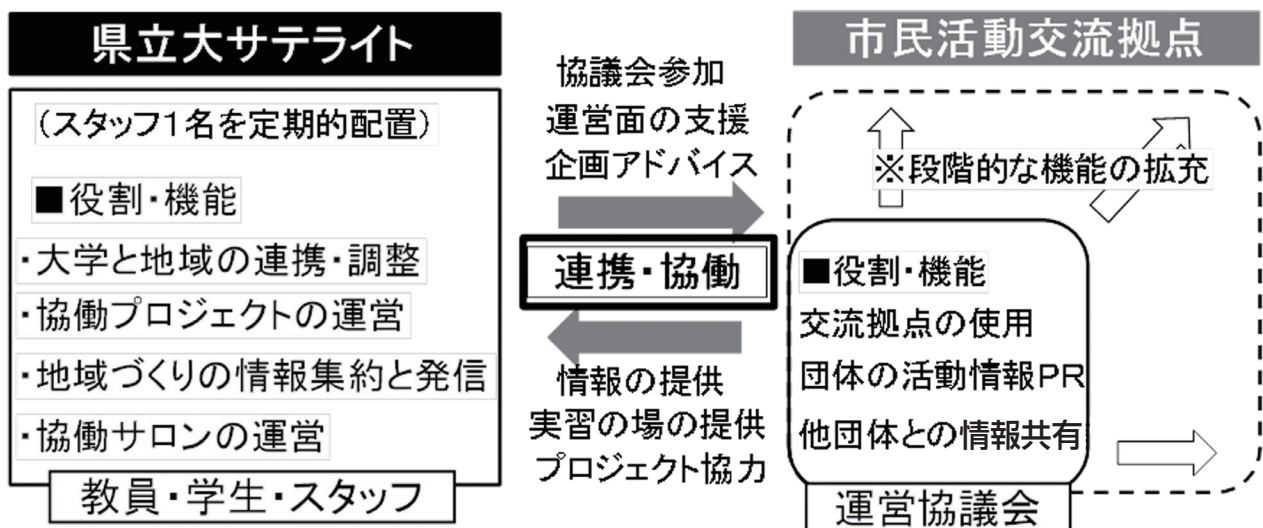
図4 学生が考えたツアーのアイデアにアドバイスする近畿日本鉄道社員

都市文化commonsでは、学生が積極的に地域や企業の方々と関わって新しいものを創造していく機会が数多くあります。学生は其中で活き活きと学び、多種多様な人とのかかわりを通して多角的な物の見方を得て、飛躍的に成長しています。

コミュニティデザインコモンズの2013年度のCOC事業関連のプロジェクトは、次年度からの本格的な実施にむけて、関係団体や地域住民との関係の土台作りがメインとなっている。その取組のひとつが、桜井市の市民活動交流拠点運営協議会との連携である。桜井市では、市総合計画内で謳われている「協働によるまちづくり」の推進のため、市民活動団体等の活動サポートと市民団体間の交流をすすめることを目的とした市民活動交流拠点を、桜井駅南口のエルト桜井の2階のまほろばセンター内に、2012年に設置した。まほろばセンター自体は、桜井駅南口駅前ロータリーに隣接した複合施設の2階にあり、多目的ホールや貸会議室、料理実習室などを備え、市からの委託を受けた桜井都市開発会社が管理運営している。その貸会議室の1つを、桜井市が借り上げて、桜井市内の市民活動をする団体が利用しているのだが、当初から市民活動交流拠点運営協議会を組織して、拠点の使い方や運営についての話し合いを、市民団体が主導にとりおこなっている点が特徴的だ。運営協議会は、月1回の定例会を開き、拠点の利用スケジュール調整、活動団体間の情報交流や意見交換を通じた相互協力、協働事業の企画などを行う運営組織であり、現在加盟団体は21団体である。市民活動交流拠点の詳細は、桜井市の協働推進課のホームページ（URL:<http://www.city.sakurainara.jp/kyoudo/kyodo104.html>）を参照されたい。

この運営協議会との連携に向けた準備段階として、事業採択の決定後に、まずは協議会メンバーに、COC事業の目的やその概要を説明し、事業目的やその内容の理解を図った。また、あわせて大学との連携に期待することもお聞きした。桜井市で市民協働の機運が高まっているなかでの、COC事業による大学との連携は、さらなる市民活動の盛り上がりのきっかけになると、多くの協議会のメンバーに思っていたようだ。大学へのニーズとしては、大学教員によるまちづくり関連の講座の実施や、オープンゼミでの学生と住民との対話、市民活動の情報発信の支援などが挙げられ、活発な議論のなかで、具体的な内容にもとづいた意見交換がなされた。市民活動交流拠点自体が、他自治体のそれと比べると、まだまだ未整備な点が多く、備品の整備などを求める意見もあったが、提案された案の多くは、今回のCOC事業で実現できる内容のものであり、住民からの期待度の高さも窺えた。今後とも、本コモンズと協議会とが連携をとりながら、提案された事業の実現化に取り組んでいきたい。

なお、まほろばセンターに、去る2014年の1月21日に、奈良県立大学地域サテライトが開設された。次年度は、市民活動交流拠点も、現在の30名定員の研修室から、同センター内のより広い研修室に移転が予定されている。新たな活動交流拠点は、大学地域サテライトに隣接しており、市民からも見えやすいより開かれた拠点となる。現在、協議会が中心となって、新たな活動交流拠点に求められる機能や新しい活動の展開を議論している段階である。次年度からのCOC事業の本格的実施にあたり、この地域サテライトと市民活動交流拠点は、中核的な役割を担うこととなるだろう。



図：桜井市市民活動交流拠点との連携と協働の概念図

宇陀市は宇陀郡旧大宇陀町、旧菟田野町、旧榛原町、旧室生村の統合によって2006年に誕生した。3町1村を併せた市の面積は約248平方キロとなり、県内の市としては3番目の大きさとなった。旧町旧村については各々の興味の範囲で知っていることはあったが、市全体としての情報を十分に得ていたのかについては自信がなかった。地域経済コモンズの主な活動地域である同市の理解を深め、当コモンズ所属教員の共通認識を持つため、宇陀市企画財政部に協力を依頼し、市全域を見学することが可能となった。12月8・9日の2日間にわたって企画課の案内で教員8名と職員1名が市の主要施設を訪れた。

1日目は日曜日であったが10時に市庁舎会議室に誘導してもらい、見学に先立って森本企画財政部次長から宇陀市の概要と主要政策について伺った。施策については地域経済に関連のある事柄を中心に進めてもらい、こちらからの質疑にも応答していただいた。昼食は見学を兼ねて榛原駅前商店街に出向き、各自で店を探した。

午後からは準備してもらったマイクロバスに乗り込み、まずは菟田野地区へ向かった。市の南部にある旧宇賀志小学校、旧大宇陀高校菟田野分校跡地の市民広場、旧下芳野小学校、アグリマートを巡って2013年4月に開園されたワールドメイプルパーク奈良カエデの郷「ひらら」を訪れた。ここでは国内随一と評



奈良カエデの郷ひららにて

される海外の希少種を含めた約1,200種の楓を栽培している。NPO法人「宇陀カエデの郷づくり」森本理事長から設立の経緯や現在の施設運営の苦労などを伺い、同法人顧問の矢野氏からは園内をまわって見ごろの時期や品種ごとの栽培上の留意点などを伺った。同園は旧宇太小学校跡地を活用して整備されたものである。敷地内には旧校舎を数棟残し、地元の特産品を販売する土産品コーナーやカフェが営業しており、かつての教室の雰囲気が存分に味わえるような工夫が施されている。因みに、カフェでは毎月第1日曜限定で給食メニューを提供している。同園を後にした我々は、室生地区へ向かい旧田口小学校を活用した文化芸術活動体験

交流施設「ふるさと元気村」や室生寺門前地域、その玄関口となる近鉄室生口大野駅、道の駅「宇陀路室生」を巡って本日の宿泊地となる美榛苑に着いた。夕食前に1時間余りコモンズ運営会議を開き、本日の感想を述べ、懸案事項を話し合った。

2日目の午前には榛原地区へ向かった。まず榛原駅北側一帯の住宅地を車窓から見学し、宇陀市総合体育館、榛原にぎわい市場を巡って平成榛原子供のもり公園を見学した。高台にあがると全体が一望でき、キャンプ場だけでなく、サッカー場や野球場までも備えていることが分かった。宇陀市森林組合が利用している旧内牧小学校、企業誘致のために整備が検討されている伊那佐文化センター、菟田野地区の毛皮革工場団地、大宇陀地区の旧田原小学校を巡って道の駅「宇陀路大宇陀」阿騎野宿に到着した。ここは重伝建地区「宇陀松山」に近く、散策を兼ねて各自で昼食をとった。昼食後は、温浴施設の「あきののゆ」、旧野依小学校を見学して市役所へ戻った。

市役所会議室において2日間にわたる見学の感想や今後のCOC事業における連携のあり方について話し合った。竹内市長には、議会期間中の忙しい時期にも関わらず、その合間を縫って駆け付けていただいた。市長が抱かれている高齢化や過疎化という市勢の現状に対する危機感と企業誘致や地域づくりの政策実現に関する並々ならぬ情熱に直に接する貴重な機会となった。2日間の案内は企画課の勝村課長補佐、運転は上西主任にいただいたことをここに記して感謝申し上げたい。また、本学卒業生の内田主事補にも休日返上で2日間同行してもらった。(津田康英)



竹内市長をお迎えして

室生寺ライトアップの調査（宇陀市） 3年生 村松千晴

今秋初めて室生寺でライトアップが行われたが、宇陀市から景品と案内板を提供してもらい、期間中に3日間アンケート調査を行った。

室生寺は山奥にあるので、夜は思った以上に底冷えがして、街頭でアンケートに回答してもらうのは正直気が引けた。また、街灯が少なく考えていたより文字が読み難かったので、不親切であったと思った。そこで、2回目以降の調査からは商工会の協力を得て、明るく暖を取ってもらえるスペースを確保し調査に臨んだ。また、地域の方々からも参拝者に対してアンケートの回答を呼びかけてもらった結果、回答数は200を超えた。今回の調査が今後の賑わいづくりに役立ってくれることを願っている。



奈良イケメン仏像マップの制作（奈良市） 4年生 吉岡千幸

奈良県は3つの世界遺産があるにも関わらず、宿泊客数は全国46位にとどまり、奈良に来る人達の大半は他府県に宿泊している。女子の目線で奈良の人も気づかなかった視角からマップを作ってみれば、もっと長く奈良に滞在したくなるのではと考えた。奈良信用金庫や奈良市役所の人達からも助言をいただき、およそ半年「イケメン仏像マップ」の製作に取り組んだ。この活動のメンバーは3人だけだったが、お互いに時間をやりくりして完成にこぎつけた。

「イケメン」という言葉に反応した人にマップを手にとってもらえれば、自分好みの仏像が見つかり、また奈良を訪れたいとなると期待している。私達が企画したチョットした事から奈良の新たなファンが徐々に増えれば良いと思っている。



着地型観光による地域振興（明日香村） 4年生 井上美智

「私たちにしか出来ない個性的な活動をしよう!」そう思って明日香村で「着地型観光による地域振興」に取り組んできた。私たちが「れきたん」と呼んでいるのは明日香を訪れる修学旅行生を対象にした歴史探検ツアーだ。1400年前に都だったこの村を舞台に、「退屈」、「難解」にならないよう学生目線で歴史の新たな面白さを伝えている。ガイド経験の未熟な私たちが修学旅行で歴史を伝えることに荷の重さを感じつつも、ここ明日香でしか体験できないことを提供して一生の思い出となる旅行にしてもらえるよう頑張ってきた。もう一つの活動“Asuka International Free School”は、外国人向けプログラムだ。折り紙やこま回しなど、昔から伝わってきた遊びを一緒にやって過ごす。格式ばったものではなく、日常の日本を感じてもらおうのである。こうしたツアー対応だけでなく、私たちの取り組みを旅行会社でプレゼンして販促活動もさせてもらった。その他にも、夏祭りや「光の回廊」イベントにもスタッフとして参加してきた。楽しいことばかりではないが、村の方から感謝の言葉をかけていただくと、もっと頑張ろうという気持ちになる。困難はあれど、やりがいをととても感じている。



新任教員の紹介

石本 東生 講師 1999年ギリシャ共和国アテネ大学大学院博士後期課程修了、Doctor of Philosophy。日本で学部修了後に、イスラエル、ギリシャへと留学をしまして、両国合わせると12年ほど地中海沿岸で過ごしました。大学院では地中海東部地域における後期ローマ時代、初期ビザンティン時代の歴史を中心に学び博士論文を書きましたが、ギリシャに関してはそれらの時代に限らず、紀元前3千年の古代エーゲ文明から、古典ギリシャ時代、ヘレニズム時代、オスマントルコ時代、そして現代まで、すべてひっくりめて興味を持っています。また、今日の「ギリシャ共和国」という範囲だけではなく、特にビザンティン時代にはギリシャ文化の中心は現在のトルコ共和国である小アジアに移りましたので、トルコにも何度も足を運びました。帰国後2001年から2013年3月まで12年間、ギリシャ政府観光局日本支局に勤務し、ギリシャの観光促進事業に関わってきました。



近年は、ギリシャ、トルコ、イタリアなど地中海沿岸諸国における世界遺産、文化遺産、そして食文化などの無形文化遺産と国際観光の関わりを主なテーマとして研究を進めています。2013年4月に奈良県立大学に着任しましたが、学生諸君の「質の高さ」に正直驚いています。講義中、履修生たちに質問を投げかけても、中々返事が返ってこないくらいシャイですが、講義終了前に小レポートを書かせると、短時間ながらも中身のあることをきっちり書いてくれます。大人しそうに見えても真剣に考え、学び、そして積極的に社会に働きかけている学生たちが多いのも本学の特徴かと気づき始めました。

岡本 健 講師 「メディア産業論」「メディアコンテンツ論」を担当している岡本健と申します。1983年生まれ、奈良県奈良市で育ちました。大学から北海道に参りまして、大学生、大学院生と9年間過ごしました。2012年3月には北海道大学大学院を修了して博士号(観光学)を取得し、その後、京都文教大学総合社会学部で特任講師を経て、2013年4月より奈良県立大学に勤めさせていただいております。専門分野は観光社会学、コンテンツツーリズム、ゾンビ学です。著書に『n次創作観光—アニメ聖地巡礼／コンテンツツーリズム／観光社会学の可能性』(北海道冒険芸術出版)などがあります。



コンテンツとは、人がそこから楽しみを引き出すことができる情報のことです。具体的には映画やアニメ、漫画、ゲームなどになります。コンテンツを動機にした旅行やコンテンツを活用した観光をコンテンツツーリズムと言います。私は、コンテンツと人の移動の関係性に注目し、コンテンツや観光が社会の中でどのような役割を担っているのかに関心を持って研究や実践を行っています。

奈良県立大学では、正規の講義やゼミの他に、私ゼミとしてメディア・コンテンツ・ツーリズム・ラボ(MCTL)を開講しています。MCTLでは、コンテンツツーリズムの研究成果を実践の場で活かす取り組みを実施しています。たとえば、奈良県吉野町におけるアニメを活用したまちおこしのお手伝い、奈良市観光協会と連携して奈良の新たな広報のあり方を研究、実践する「ならば—奈良Laboratory」、そして、近畿日本鉄道と連携してツアー商品の造成、さらに、ゲームで描かれるドット絵を使った奈良の情報発信「ナラクエ」などを行っています。

奈良県立大学地域サテライト

平成26年1月21日、奈良県立大学と地域との協働まちづくりの連携拠点を目指して、「奈良県立大学地域サテライト」が桜井市まほろばセンター内（桜井駅南口、エルト桜井2階）にオープンしました。



松井正剛桜井市長と伊藤忠通学長
(開所式のもよう)

この県大地域サテライトを通して、桜井市との連携協力をより一層促進するとともに、明日香村、奈良市、宇陀市といった、本学の学習コモンズシステムに係わる各連携自治体との中継地として、それぞれの地域活動の情報集約と発信、そして地域連携づくりの場を築き上げていく計画です。

これまで、桜井市において本学学生は、地元の七夕祭りのイベント企画やまちあるきマップの作成など、地域活動に関して学んできた強みを生かして、数多くの実績をあげてきました。これからは、「地（知）の拠点整備事業」の一環として取り組む本学の「コミュニティデザイン」コモンズのフィールドワークの現場として、学生が地域住民と直接交流していく際に、この県大地域サテライトを活

動拠点として有効に活用してもらい、桜井市のコミュニティ再生につなげていって欲しいと考えています。

「奈良県立大学地域サテライト」には、毎週水曜日（午前9時～午後5時、年末年始、祝祭日を除く）に本学の地域交流室より職員1名が赴きます。当面は、サテライトの具体的な運営方法を桜井市市民協働課と共に協議したうえで、奈良県立大学と地域の連携と調整をはかり、地域の活性化に貢献していきます。

奈良県立大学の連携協定先

- ◆ 奈良市
- ◆ 一般財団法人奈良県ビジターズビューロー
- ◆ 十津川村
- ◆ 奈良商工会議所
- ◆ 奈良県商工会連合会
- ◆ 奈良県旅館・ホテル生活衛生同業組合
- ◆ 桜井市
- ◆ 御所市
- ◆ 奈良信用金庫
- ◆ 公益社団法人奈良市観光協会
- ◆ 宇陀市
- ◆ 奈良テレビ放送
- ◆ 御杖村
- ◆ 王寺町
- ◆ 高知県嶺北地域観光・交流推進協議会
- ◆ 明日香村
- ◆ 奈良県立大学学生の奈良県実施事業への参加に関する協定

編集後記

今号では、「地（知）の拠点整備事業」において本学が推し進めていく4つのコモンズ教育の先駆的な取り組み事例、そして各コモンズ領域の特徴を生かしたこれからの地域活動の方向性が紹介されました。これまで、このような活動は個々の教員の取り組みとして行われてきたために、大学全体として共通の認識を得ることは少なかったように思えます。本学が「地（知）の拠点整備事業」に採択されたことを契機に、これまで行われてきた多種多様な事業を全学的な取り組みへと変えていくことで、より一層、効果的、効率的な地域貢献を果たしていきたいと考えています。



奈良県立大学

Nara Prefectural University

地域創造学部

「観光創造」コモンズ 「都市文化」コモンズ 「コミュニティデザイン」コモンズ 「地域経済」コモンズ

奈良県立大学

検索

<http://www.narapu.ac.jp/>

〒630-8258 奈良市船橋町10番地

TEL 0742-22-4978 FAX 0742-22-4991

お問い合わせは 月曜日～金曜日の午前9時から午後5時まで

お問い合わせアドレス students@narapu.ac.jp